

魔法の力

沖縄県立名護高等学校二年 渡具知 和奏

一人一人が持つ思いは、大きな力を秘めている。この世界を平和に包み込む魔法の力を。

私が住む地域の目の前には、どこまでも続く青い海が広がっていた。しかし、今、新基地建設の工事によりその海の輝きが私に目の前から消えようとしている。

十四年前、私がまだ二歳だった頃から、私は家族と共にピースキャンドルという活動を行っている。ろうそくを入れたペットボトルを片手に、過ぎ行く車に手を振り続ける。これが、私の毎週の習慣となった。まだ幼かった頃は、何で私だけ？と実際に両親にぶつけたことがあった。しかし、いつもそんな時母は、私にこう言った。「あなた達のためにやってるんだよ」口癖のように、いつも私にそう言った母の言葉。今思えば、本当にそうだと感じている。そう思えるようになったきっかけは、十六年という日々の中で出会えた人々の思いにあった。物心つく前から、私は両親に連れられ、県民大会や平和集会など様々な集会に参加してきた。その中で徐々に沖縄が抱える問題に関心を持つようになっていった。そんなある日、私の目にある衝撃のニュースが飛び込んできた。うるま市の女性強姦殺人事件。ジョギング中の女性を米軍兵士が一瞬にして恐怖へと陥入れた。このニュースを目にした時、私は言葉を失った。何の罪もない人の命が、基地があるが故に儂く散っていく。戦後から七十年をすぎた今でも続く残酷な現実には、私は深い憤りを感じた。

「今も沖縄への差別は続いているよ。」そう呟いたのは、沖縄戦を経験した私の祖母だった。時は、第二次世界大戦真っ只中の昭和十九年八月の夏休み、小学校三年生だった祖母は、家族と共に熊本へ疎開をした。十日間かけて、鹿児島まで行き、そこから汽車を乗り継ぎやっと辿り着いた熊本で祖母が最初に目にしたのは異様な光景だった。「歓迎されてないことはすぐに分かったよ」道の両側にブラツと並んだ人々の群れ。着物をつけ、荷物を頭の上に乗せていた沖縄の人々を見る蔑んだ目は、まだ八歳だった少女の目に悲しくも強く焼き付いた。祖母の話聞いた時、あのニュースを見た時と同じような憤りがはしった。それと同時に私の心の中にある強い思いが芽生えた。今こそ、向き合わなければならないことがある。私は、この十六年間で、両親の熱い思いを間近で感じてきた。「次の世代を生きるのはあなた達なんだから」と手を

引き、たくさんの場所に連れていってくれた。その中で感じるようになった沖縄への理不尽すぎる現実。それは十六年という時を重ねるごとに強さを増していると私は感じている。両親のように、県民が声を上げ、意志表示をしてきた場面はたくさんあった。しかし、今もなお、工事はブレーキを踏むどころか、回りを見ずにアクセルばかりを踏み続けている。

八歳だった少女が、孫を持つおばあちゃんになった今、祖母のようなあの悲劇を体験した人々が自分の口から思いや願いを語れることは難しくなった。しかし、戦後直後から基地が存在する沖縄では、子供だけでなく、親の世代までもが、「基地があるのが当たり前」と思っている人や、基地があるからこそ生じてしまう危険を軽く考え、心を持っていく人は少なく、あのうるま市の悲惨な事件でさえも、「なにそれ？」と知らない顔をする人がたくさんいる。身辺であるからこそ、近すぎるからこそ、気づくことのできない「恐怖」もし、この現状がこの先も続くと考えた時、「そんな世界はもう嫌だ」と思うのは、私だけなのだろうか。今を生きて、未来を担う私達は今何をすべきなのだろうか。沖縄と向き合う。そのために、自分の意志と向き合っていく。これこそが、私達に求められているのだと強く思うのである。中にはやはり、「どうせ私なんかやっても変わりっこない」と思ってしまう人もいるだろう。私も実際「私なんかやっても変わるのかな」と両親には言えず思っていたことがあった。でも、今私は確かに変わっている。この沖縄が抱える問題と向き合い、自分の意志で考えることで、この十六年という日々の中、私は小さくとも確実に一歩一歩進んできたのだ。無関心であることは、とても楽なことだ。しかし、決して私達はそうであってはならない。なぜなら、時代の流れは私達の意志そのものが作っていくのだから。私が歩んできた道はきつと、大きな壁を乗り越えるには遠回りなのかもしれない。でも私のように、自分の意志で考える人が増え、その思いが繋がっていけば、それは近道へと変えることができるのだ。「一人一人の意志が繋がりが合い、作られていく世界」平和という未来は、誰かではなく、私達自身が作っていける。なぜなら、私達には誰かと繋がる「意志」という魔法の力があるのだから。